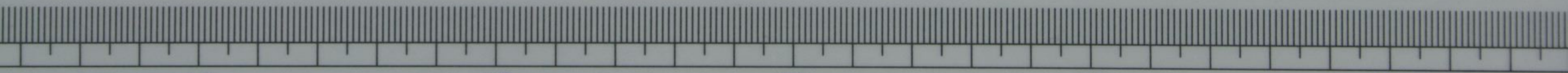




註解
 改正月令博物笈
 八月部
 二

5
 数
 529
 10



10

15

20

25

30

5
529
卷

八月部目録

△印あつハ非諸の
季と持りのを

養生の法。雨風の考。米の豊凶。
妙菜の季と。祭。其外人
家重宝のこころ。処々小敷多あ
るゆへ目録よりハ一るさす

八月

陰陽生 異名考
調子

初

白露節

七三候

△秋分中

七三候

三

日令

八月其定。くわくし干支
のそまると。愛ふあり

衣服式

四

△天中節

四

八朔

△八朔の賀
△田実の賀
△田実の祝
△田実の節

△田実の節

四

繪行器

五

△綵雀

五

御馬會覽

六

△八朔梅

六

生花式

六

△三村祭

六

塚天神祭

七

日四
△天壽の節

△京都北野祭

七

日五
△白鬚社

八

60 65 70 75 80 85 90 95

日一十 日二十 日三十 日四十 日五十 日六十 日七十 日八十 日九十

△敦賀祭 今十
△司召 今十

△和泉大鳥明神祭 今十
△待宵 今十

△豊後八幡祭 今十
△中秋節 今十

△名月 今十
△新正月 今十

△名高月 今十
△今宵月 今十

△最中月 今十
△見望月 今十

△月こども 今十
△今宵月 今十

△月餅 今十
△名月餅 今十

△放生會 今十
△山城八幡祭 今十

△諸国八幡祭 今十
△鶴岡祭 今十

△豊前門司 今十
△箱崎祭 今十

△引分の駒 今十
△武藏の駒 今十

△十六夜月 今十
△伏待 今十

△都菅太神祭 今十
△都御灵祭 今十

△伊弉名祭 今十
△長崎菩薩祭 今十

△筑前府祭 今十
△京都西院祭 今十

△月令 今十
此部八月の定め

△後彼岸 今十
△秋社日 今十

△京都活杖祭 今十
△死杖の祭 今十

△秋奠 今十
△碓氷 今十

△衣打 今十
△毛見 今十

△落水 今十
△下りやま 今十

△新結 今十

△時令 今十
此部八月一ヶ月の時

△暴風 今十
△肌寒 今十

△中寒 今十
△長夜 今十

△草木 今十
此部八月の草木と出

此のよるや三秋の用ひ来る物

△初紅葉 ハナ △敗荷 ハナ △荷衣 ハナ

△新蓋草 ハナ △名の木散 ハナ

△牡丹根分 ハナ △木芙蓉 ハナ

△木犀花 ハナ △桂花 ハナ

△緋紅 ハナ △檀特花 ハナ

△金剛草 ハナ △あろめ花 ハナ

△花ひくろ ハナ △鳥頭 ハナ

△草鳥頭 ハナ △刈萱 ハナ

△紫地 ハナ △月草 ハナ △香花 ハナ

△宇治花園 ハナ △滋賀花園 ハナ

△薄穂 ハナ △はまの薄 ハナ

△根地草 ハナ △穀精草 ハナ

△紫蘂実 ハナ △黄蜀葵 ハナ

△烟草花 ハナ △藍花 ハナ

△蓼花 ハナ △そばの花 ハナ

△芦花 ハナ △項羽草 ハナ

△虞美人草 ハナ △龍膽 ハナ

△さざん草 ハナ △玄参 ハナ

△木賊刈 ハナ △菊萱 ハナ

△わづの堀 ハナ △苦参引 ハナ

△たぐや引 ハナ △菜堀 ハナ

△石榴実 ハナ △銀香実 ハナ

△茴香実 ハナ △通草 ハナ

△蔓荔枝 ハナ △王瓜 ハナ

△種瓢 ハナ △眉兎豆 ハナ

△菱取 ハナ

△葎菌 ハナ △葎 ハナ △石葎 ハナ

△薺草 ハナ △薺 ハナ △薺草 ハナ △薺草 ハナ

△草茸 △標第茸 △子 △猪茸
△舞茸 △槭茸 △蛇茸

○天狗茸 △月夜茸
○栗くけ △海くけ

△松露 辛子 △中縮 辛子

△粟根引 辛子 △貝割菜 辛子

△摘菜 辛子 △中抜大根 辛子

△同引菜 辛子 △菜種蒔 辛子

△胡麻刈 辛子

△芥子蒔 辛子

△大根せく 辛子 △罌粟まく 辛子

△燕掃 △稻肩鳥 辛子

△朝鳥 △小老ころる 辛子

△波鳥 辛子

△色鳥 辛子 △鶉 辛子

△山雀 辛子 △こがら △小陵鳥 辛子

△四下雀 △日雀 辛子

△猿子鳥 △照猿子 辛子

△頬赤鳥 △あろろち 辛子

△瑠璃鳥 △眼白鳥 辛子

△鶉 辛子 △島鶉 辛子

△連雀 辛子 △尾長鳥 △練筋 辛子

△啄木鳥 辛子 △菊戴鳥 辛子

△椋鳥 辛子 △栗鷹 辛子

△鶺鴒 辛子

△高雀 辛子

△額鳥 辛子

△檀鳥 辛子

はるさ月 秘藏抄出 △ませ月
△くさ月 己上莫傳抄出 △秋月

△月見月 △紅漆月 己上藏玉抄出
△長月 奇九月小定い △竹乃春 非八月又九月

異名註 △桂月 桂の花開く
時故名つく 桂秋も同

△清秋 △此頃空明 不清き故
△仲高 秋乃中 しく夏あり

△壯月 △八月辛と得 塞せ 出雅
△白露 節の名 註節の如ふり

△南呂 律の名 註口の律の如き
△葉月 と云 此頃木は葉色づき

落る故葉落月の畧也 清輔與後抄
又たつさ八月のちけ字畧 たるえ

又たつさ 初来也 初て来る月故
△長月 との夜初めてきたと覺

ゆり故 實長さい冬さるれ 夏
の短つたり 對してきたと知 火

也 季寄 八月とさるあれ 九月と
△竹の春 此頃暑さ去り寒さ来る

とさる氣にて至て涼く 故小唐の
俗竹の小春といふ 贊寧 節譜出又

此月竹さかんふあるゆへ 名づ
くともいへり 花こ月のとこ

小も考へあり守をー

秘藏抄 たるさ

胡乃とくれうと考めさる

全 木深月

相いんく名とさるくさる月
あやむありきさやほさる

莫傳 草は月

くさは月とさるあすのはち

秘藏抄 さるさ月

あさちが来とさるさる
藏玉 紅深月

志くれつとさるさる見もさる
紅深月のさるさるさる

白露 八月の節の七十二候の草木七十二候。日出入の昼夜長短を記す。



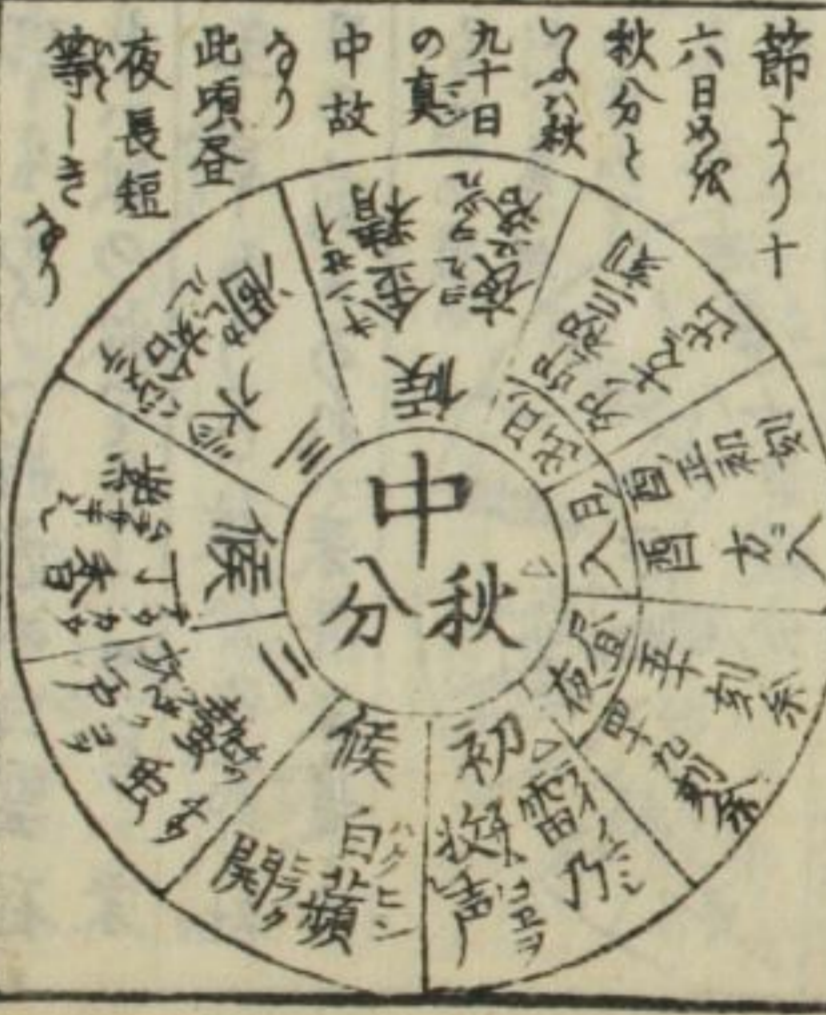
△鴻雁寒と恐まて来り○槐の花きた△燕ハ此頃北へかゝるこ
 ○桂の花きた香風ふつづり
 ○諸鳥ハ養着とてよろけ食

物とせくく入冬ノヤイといす
 あり○断腸ハ秋海棠の事
 始て嬌ハ蒼とつふる雁燕の
 事ハ委しく生類の部は出と

節占候 今日暗天るれば稲作十分の実入り

日和はほきててくくく
 火不属とくぬりてあま
 雨ふれも實つとくく
 風はくさそいあふさる

秋分 八月の中ひ七十二候の草木七十二候。日出入の昼夜長短を記す。



此月々々来二月まで雷声を
 収めて鳴らす○蘘苳草あり
 ○蟄虫坏方ハ虫冬の寒氣を
 ふせがんとて土に穴をふく

○丁香紫とて花の咲とつ
 ○水は是とて漸く涸るあり

○金精とつる星夜の中は西
海のつらなり落るはくくさ

秋 天氣右候 今日晴天あれは
縮作より曇る

ありし夕立よるれはうら然
も冬いなりて米の價貴さ

事もありの西方は白雲有
とい秋の収まり 黒雲ハ来

年早まりの秋分の節社
日の前よあれは東年米豊

今朝の雲の
行と見て年
の豊凶と

ある但
行方
定まり
る時
證とせ
ぞ定りて
一方へ吹と
見て知るべし



秋分禁忌 殺生とる事をなれ
刑と行ふことなれ

喪と訪らひあつひの病人と尋
訪ふ事をなれの大酒とは

他行とることなれ

秋分祭祀 今日先祖と祭る
二月春分の如く同

日令 八月日の定まりたること
の定まりたること此部あり

朔 ○此の月も朔日のひ
まはるは其月中の日和

抵よりとつとも今日少し雨
あれは此月中風雨頻なり

つり○晴天あれは縮ふこと
然もとも冬も早はけり

麥野菜いあれし○又大風
雨あれは麻ありて布の價

來年貴し大豆小豆
いとも高しかすつり

朔 衣服の式 今日武家
民もい冷氣

くろくも帷子と着麻上下とこ
き礼と勤むべしは上下の略儀

○小笠原家秘旨進退集曰五月
五日より八月晦日まで帷子あり

八月の内は若寒き時の袴も
小袖もかきびり下り

かきひもあつてはけり
これぞ一とくし

朔 天中節 此日の凶悪の日
故に昔は陰陽家

天中北の符一貴
賤の門戸は賤とくは貴

これに陰陽一家の説あり
○五月五日の午時刻と天中

節といふ五月五日の異名
とくはかりし様要録に出

朔 八朔 △八朔の賀 △田實の節
△田圃の節 △田面の祝

△田の實の祝 △憑祝 △恃怙節句
○此日たのめいふもたのめ

儀式もいひて家々たがひふ物
と贈りあふ事あり ○公事根源

小此事本説る一世俗の風儀
也とありて後深草院の建長の

頃より始りて今もあつたの
米と折敷土器をどれ入きて人

のりへはけりけりとかやと
るなり ○日次記事ふ此祝ひ昔

いさる事あり中世いさるて
農民稻の初穂と今日禁中へ

奉り事より起りたりあり
○一説は田の実田の面をかくかく

字に頼むといふ字を通りて人
かひふたのそら多む心を物と

あふ事をいふとあり ○今世の武
家が民も厚く祝ふ夏とあり

○唐土にも今日勝をす月令續
勝の新穀と祈る祭の名其外

説後委く日本歳時記出でり
○八朔やまゝ高き踊のいふ

水

狂 今朝これの精ふも秀の穂とたて
れのれきたのむ前句るらん 支竹

朔 繪行器 本地にて行器乃
小されて造目

出度繪とかきたるへ田の實
又、菓豆のたぐひさぬく物
作はて互に相たのむの意
混して今日おくるる京師

い今もそとあつる八朔前
日ふり市中に繪行器と賣り
ありく也真粉糕ふ角小豆と
むららんと粘てこれと藤乃

をれと御所言葉のつり
是とも名不ふ入て贈と合と
非 絵柄墨やよふ封箱の紋
奏ふひく後りまのる飛文除鬼

朔 緑雀 造雉。造松虫
銘をねもしくく作と給
不かひまそへて児女同士と

アあり又意故仁と枝を
さつてもねくふくとなり

非 けにる緑雀の細工人 魯文
ひま放仁の巻上のはねを 船羅

朔 御馬戯覽 今日東都
馬士兼付の竹を鞭とこれ
ひ来る古十五日駒迎の例や

朔 京 松尾神事相撲 東西ふ
往古の内裏相撲節會の通に
て行なわれり。八幡ういその

式社傳ありとつり
神泉苑善女龍王祭
朔 八朔梅 是早梅の類なり
堂上方の賀儀よ

も取用ひらり事も有とつり
非 難波はや稚多うの秋の梅
八朔や承平の秋と梅の花
梅咲や竹の長たつる日氣

八月 月満
今日 朔日
朔日 妙術
眼明袋 今日百神の
露と取りて紅縮ふ

ほくろ眼とあふ目明ふらる
○又方柏の露と取て洗ひてもよし
○七月晦日東ふ向ふ樹の枝と
とりて炭ふやま今日其炭ふて
赤白舌随節滅とくかまて門
は押せ火難盗難病難口

舌等乃りわくくひ張きぬ
るいせしる

朔日 生花式
秋海棠 萩 桔
梗 秋菊 今日生さ

朔日 和三村祭
坂申 斐町の東
ふらう開口 明神

と云 延喜式出當地廿日の名へ開口
村木戸村原村の間へ故ま三ツの村
明神と云るり又大寺ととを
あつゆふ俗は太寺祭とてや
つるり住吉明神乃外宮と
称と祭りの朔日二日兩日あり

二不成 今日白髪と板ふは
日就日 交易又衣服と裁ふ心

三風雨あれ麻宜し布の
日價高し 晴天るれ冬早
米ふとら 今日日月影曇りて
あざやふ見えざれ二月雨多

○今日 竈の神の生く日祭の
十月をれ今日竈と清くを福あり

三和 塚天神祭
戒町東ふあり
威徳山常樂寺

穴天神とも云六月十三日と夏神
樂と今日と秋祭と云神興を
ひと島へ渡御ありあり 〇毎月

廿五日ハ 連歌興行あり
非 戎あふし小社の様なる 李坂

四 今日將棋とて勝る
日者 年の終りて福あり 肩

かる者ハ 病ハかる 故は今日と
圍棋ハ 福乃日とつる

四日 天壽の節 唐ふてい今日と
天壽の節といふ

四日 京北野祭 祭神三座中の
菅原相承り昔

祭五日よりしと永承元年
より八月四日不定り拾芥抄出

此祭甚美麗しと神興下立
賣の西御旅處へ渡御ありしと

社記不見へれといふ今日
○按じると應仁の頃より此祭

退轉して今潮く氏子町より
芋莖にて神興と作り渡御のまね

びとあすまをり九月四
日なり是と俗に芋莖祭といふ

哥 年中行司哥合 蓋堅
たのむまをりしとていさする

少辨のあけはれとていさする
○非 さとめあはれ月秋と水のあき移水

狂 いふいふのる場とていさ
るこをいふとていさする

五日 千秋節 今日唐玄宗帝降
誕の日故に名を後

改て天長節と云今日王公の鑑と献
士庶人の承露囊と云月のと相ね

る 隋唐嘉話 聖揚万里揮塵錄 出
○今日交易 衣裁を忌むる

五日 江白鬚社開帳 昔は今日
開帳あり

元祿の頃より絶えりといふ
○非 戸といふ林の名えはの志 藤原

七日 南 道祖神祭のこい祭といふ
都の人根田彦命といふ

八 今日と竹酔日と云竹と植ま
能あがり季の五月といふ

十日 不成 今日小児の額ふ朱にて点
就日といふ一 痘瘡癩疹と

かゝりし諸病をのぞくといふ
これと天灸といふ

十日 和 上石津祭神休 蛸子の神
泉 下石津にも社有 此祭は正月

十越 敦賀祭 敦賀の古名角鹿さりの祭神

仲哀天皇さり 氣比社とつゝ 神事二日より 今日までとる

を賑はしく京師 祇園小使 ころ山かきり等つろく右さり

十一 来年ハ早放水飲こ占るよ 日ハ今朝早く起て水辺よ

至り風波さるぬの水と一處うち かさひて其水と見て知る其水

ひくやうさるい来年水多きさ たり水溢さるやうさるい来年早く

十一 司召 秋の除目 京官除目 日 定考 各目抄に出

諸官人王臣國司ふ至まで不 徳の勝より由と奏して品々の

爵禄と賜ふ日より春の縣召 小おさど二月より八柄とさるむと

列見とつひとれと春あつめて 奏と侍と擬階乃奏とつひ

此人々と多しひ出して爵禄と 賜ふと定考とつひさる

哥 拾遺 貫之

いづつハ世よあつりものさる砂の ねも我とや友とさるしん

非 定考や茶と円然さるは早也 狂 飯も咽通らぬ々々乃司を

和 大鳥明神祭の社ハ大鳥村ハ 泉あり和泉の二宮祭ハ年ハ二度

十四 待宵 小望月 十四夜月 毎月十五日望月と

称ふるゆへ今日と小望月と云 〇十四日と待宵とつゝ事 中頃の

能偕ふつひ出さる 和歌連歌 ころれ待宵とよむとさるる

哥 待宵とさるる人々待よの のはぐ云心までつゞも恋の歌へ

哥 十四夜月とつゝ題とて 道香新

明月今宵の月はくまら
明日の月の中乃新とほり

連 昨日の名は月もあつと云ふ

月今宵是もくも明日の光を宗政

月をむきあつてあつと云ふ

俳 泊青や息子のいびき又後

狂 泊青やまろも月の物ゆ

狂 泊青やまろも月の物ゆ

詩 十四夜五字對句 同上

天意將圓夜只争一夕早

人心待滿時恰作九分圓

詩 十四夜七字對句 詩變

今夕試見先與約 未望夜

來宵定賞莫相違 鏡久圓

詩 十四夜月詞 白居易

光彩遍空輪欲滿 光ミチクテ形

詩 全 白鶴

二七秋客月色奇獨擎吟筆

飲 芳卮 二七十四夜ノ月面白クヒトリ

十 豐 八幡祭 府内小あり今日

後 放生會 行り魚海中へ放

事 甚賑り 是て府内濱の市と云

十 今夕月曇れ万の事ありし

五 今日雨ふれ来年正月元日の

天氣 又来年水多し

多 鱒胎む事あり又蕎麥

実を 〇月あたらしく

多 魚とくみり

十 中秋節 秋九十日中最中

五 秋九十日中最中

秋九十日中最中

秋九十日中最中

秋九十日中最中

秋九十日中最中

月の異名とてとるる。唐に今宵と中秋の夜といひて月を賞とる事。李唐の世とて盛ふして詩人文人詠多し。野庭に出

十五名月 良夜 良宵 端月 正月 三五夜 樂天詩

新月 名高月 今宵月 望月 最中月 月見

月 今宵月 月 聯月 半名月 故事 十五夜

日本十五夜の月を賞とる。初元天皇の御時より初と舊本長

明四季物語の出る。又今宵の月をあらく詠とる。哥ハ天曆の御製

あり。月の香の漢ひて唐の玄宗貴妃と大液池のぞとて月を

詠ひなす。事又羅公遠此夜玄宗小侍と月を詠ひする

事。開元遺事。速更等見。次は故夏あり。名月の事説多し。季

日本歳時記に出る。望月の満月なり。三ムヌモ相

通じて。三とモと同音をれ。又月の出る時。入日と向ひ望む

少。望月とて。毎月月と日と相のぞと見とる。月とい

へ。連誹ハ今日。の季とす。端正月とて。端しく正圓月

か。斯く。事文類聚に出。新月誹諧の季。三秋とて。る

と。る。香もあ。詩歌の説。違へり。季。三秋の部。十二丁目

名月 霓裳羽衣曲 羅公遠 故事

者十五夜玄宗ノカタハラニ在。テ月ヲ詠フ。杖ヲ取テ空ニ投

ケレハ化レテ橋トナル。其色銀。コトシ帝ト共ニ此橋ヲ登リ終

二月宮ニ至ル。仙女數百入アリ。テ歌舞ス。帝問。コレ何ノ曲

八月 月會 名月

ナルヤ 蒼へテ云ク 霓裳羽衣ノ曲ナリ 玄宗コレヲヒソカニシ

ルレ又橋ヲクダルニ歩ニ隨ヒテ橋ハ次第ニ滅シケリ

其後伶人トモヲ召シテコノ曲ヲ制表ス 事文類聚ニ出

月餅 十五日 唐土燕都ノ人サシクノ餅ヲ作り名ト形

ヲ思ヒクニ好ニテ人ニ送ルコトナリ 是ヲ看月會ト云 廣義ニ出

○又麩粉ニテ作りヤキテ大中小段々ニタニカサ子テ上ニ五色ノカサ

リヲ置キ桂ノ花ヲサレハサシテ月ニ供ストイヘリ 海水談特ニ出

○本朝ノ團秤モコレニテラロタルモノカ芋ヲ食フハ諸國ニ普子

ケレトモ東都ノ俗ハコノ日給ヲ食フナリ

狗寶 狗中秋ノ月ヲ望テ戲寶ヲ吐クノ團秤ノゴトニ

即チ其實トモテアノビ復コレヲ飲ナリ 農夫コレヲ知りテ月

下ニ光リアルトコロヲウカミテコレヲ取ルトイヘリ

續古今 天曆の御製

月ノ光ハ月ノ光ト云フコトノ月乃

ト云フコトノ月乃ト云フコトノ月乃

詞花 駒引と合て 藤朝信朝臣

引釣の影とさうへてあふ坂の

せと海よりくそ月ハ出ク

拾遺愚草 定家

明ハ又秋の月ハもさぬを

かこみく月のねきのこ

金葉集 仲正

めく 来る秋の草はさうさう

月のまはるるを青さうさう

全 公實

秋の影はさうさうさう

あふみの月乃若くをわく

相玉 十五夜待月

名月暈 月の暈 其外名 月の事 博物志の

の部 季一を出と

非 籟にて及度 九月の月 只雄

狂 天つ下 今有 九月と云フの事 博登

名月曇 雨をくって暗やうぬ

哥 家集 藤原兼

引しとて人せぬとぬれ今有かも

非 詠香の花もいへ月と能鬼

狂 空をぬきとて白やれ秋果え

かろ月との夜ふとくこや 若良

名月雨 御集

けりかろくくや

けりかろくくや 後水尾院

非 月と身あはれを 陸光 立直

狂 月教よきて今有は 若良

詩 名月五字對句 同上

天上十分月 一年光正滿

人間一半秋 萬里氣尤清

詩 名月七字對句 詩礎

不知千古中秋月 九秋半

老却幾番浮世人 萬里圓

○此句ハ哥ニ大カメハ月ヲモメデシ

コレノコノツモレハ人ノ老トナルモノ

トヨミタルト同じ心ニテ昔カラ

此中秋ノ月ヲ賞美スルハ

イク度カ年ヨラセタコトカ

知ラヌト云フコトナリ

詩 中秋之句 菟華

詩 一年逢好夜萬里見有時 張佑

一年中テ面白シ夜ニ逢テ萬里ノ外ニテ月見ヲスル時ハ今宵ジヤ

詩 三秋端正月今夜出東溟 韓愈

夕ニシクニシムルイ月ガ東ノハテノ海ヨリ出ヅルナリ

詩 高秋渾似水萬里正圓明 孟郊夫人

秋フカクナレバ山モ川モスベテ水ノシミワタリタルヤウナケレキテ萬

里ノアナタニテ月ガ一メンニアキラカニテ一トカナルヨシナリ

詩 三五夜中新月色 白樂天

十五夜ノ月ガラタニサヤカナヤウニミエル

詩 名月之詞 唐 僧 康白

尋常三五夜豈是不婵娟

十五ヤノ月モアザヤカニウルハレクナイ

テハナケレト八月十五夜ノ月ハカクベクナモノニヤトナリ

及至中秋半還勝別夜圓

月ノ十五夜ノバニ夕外ノ清光

凝有露皓色爽無煙

カコツテ露ノヤウニ見ニル皓キイロサハヤカニケムリホトノクモリモナイ

自古人皆望年來復一季

△カレヨリ人ミナ今ヨイヲ覺レテ一トセニ夜ノ良夜トスルナリ

詩 名月之詞 唐 王 建

中庭地白樹棲鴉冷露無聲

濕桂花 庭ニハ月ノコゲ白クホニハカラスカスミタリ露ハ月中

ノカツラノハナニコリテツカニレテ今夜

月明人尽望不知秋思在誰家

今ヨイノ月ハ世上ノ人皆見テ賞スルニ方其中ニ実ニコノ秋ノ情ヲヨクシリタ

凡人ハ何カ家ニアラン

狀 月見之文 尺腋漢文ナリ

良夜之清光萬里同

賞如公得閑請共遊

廣池行厨安排已具

馬速許為

尺牘 昏替并王解

良夜仲秋。此夜暗光名光。寄

潔萬里万郷。方國同賞上

称數中縱目行厨上淺酌

中鹿饌。淡飯按排上設不

勞公中悉余相計許駕上仰

望伏侍中相許然諾

扶 名月文返事

兼命一輪之明輝王賞詠記

得高筵會詩客閑地吟行尤

一大勝事應招趨拜以謝

尺牘 上中下昏替ヲ記ス

承命上辱昏中指示一輪

明輝万里素影。秋月佳名賞

詠絕比倫。勝遊賞。何如記

得高筵上聞說瓊席張雅

宴中群友呼來為宴會閑

池吟行池上遊翫一大勝事

○詩人博物。興趣。逸興

應招上一諾應命趨拜

○月見矣。人マカク。○オモロイ

レマタチ

○オモロイ

レマタチ

○オモロイ

レマタチ

○オモロイ

レマタチ

○オモロイ

レマタチ

上疾至不祥 中來謁 中不

超時 中 倒履走謝

クレン上

十日 放生會 放生川△のり

皇の御宇養老四年征夷の事ありて日向大隅大

禁庭より宇佐八幡宮へ御祈誓ありて敵を亡らし

其後八幡の託宣ありて此度の軍人多く死せり放生

會とあすべりし神勅ありしより國々初

其外説多し委しく神佛祭礼記に出たり

哥 年中行司 為秀 業終てはかきも

新撰六帖 知家

男山 放生會の事ありて山城國雄山

八幡宮奉行り事ハ勅會ハて

公卿殿上人御参向ありて甚

嚴重なり御神事あり放生

會祇園會土塔會を本朝

三大會と昔ハ申せしを今

放生會の勅使御参あり

て祇園會ハ其式のより土塔

會ハ無き放生會ハ

今曉寅刻神輿御下山あり

中頃兵乱より退轉ありしを
延宝七年御再興ありしを

十諸國八幡祭 ○京都にての
御所。若官

○等持院。廣沢。てこの枝。山
崎。門出。大坂。ひての。三ッハ

藩祭 ○江戸にての深草。但
備年。世外。法谷。上西。くは。あり

志賀八幡祭 近江。鶴岡祭 鎌倉
△譽田祭 河及。八月。神事。あり。十四日。実
の刺。と。奥院。渡御。あり

△宇佐祭 豊前。國。八月。十五日。祭。礼
の事。當。社。が。姥。ま。り。し。へり

△安濃津祭 伊勢。國。昔。小。社。寛。永。九
年。造。營。あり。今。も。あり

△豊浦祭 長門。國。豊浦。郡。小。の。祭。九
月。五日。昔。八月。あり。ひ。マ

△箱崎祭 筑前。豊前。司。祭。大。祭。其
外。多。あり

十播野口念佛 孝謙天皇
の御宇。教

信と云僧加古川に庵して念
佛と常旅人の行と負ひ

みどして。つて。て。く。貞觀八年八
月十五日盜賊の。ふ。首。と。切。ら

る其庵の跡。寺と。建。教。信。寺。と
号す。今日。僧。徒。集。り。て。佛。事。と。す

十六 駒迎 △駒牽 △引分の使
△望月の駒 △ころ原の駒

△上野駒 △武藏駒 △志を以て駒
△穗坂駒 ○昔ハ諸國の牧より

牧。の。馬。と。奉。野。の。事。禁。中。へ。馬。と。奉。今
日。信。濃。勅。首。の。牧。より。六十。足

逢坂山。と。引。來。る。右。馬。寮
左。馬。寮。の。官。人。請。取。て。禁。庭

へ。奉。る。あり。天。皇。南。殿。に。出。御
あり。て。御。馬。を。御。覽。し。公。卿

已。下。次。弟。に。御。馬。と。給。り。の。尚
又。次。將。と。り。て。院。の。御。所。東。宮

へ。も。ま。り。せ。り。此。勅。使。と。り
分。の。使。と。り。元。の。十五。日。有

去。り。と。朱。雀。院。の。御。國。忌。り
當。り。少。く。十六。日。あり。たり

江。上。第

哥 續後撰

雅具

あふ坂の雲さち物影さけり
あふそ秋の月ら月の物

拾遺 さり糸の物 馬達

あふ坂の園の雲南さけり
あふらあふささりの物

詞 いさきの物△引さけれ物△宮
人のあてむさるあふ坂をさけりあふ

ちの物△雲の下乃引さけり△山さ
らる△お坂の杖さふさふり△よら

むさる△引さけり△あふさけり△や
あふさけり△あふさけり△あふさ

あふさけり△あふさけり△あふさ
あふさけり△あふさけり△あふさ

あふさけり△あふさけり△あふさ
あふさけり△あふさけり△あふさ

あふさけり△あふさけり△あふさ
あふさけり△あふさけり△あふさ

あふさけり△あふさけり△あふさ
あふさけり△あふさけり△あふさ

十六夜月 △宵不知△能より
今日四季と寸哥

詞 さげささきのあふさけり△あふさ

あふさけり△あふさけり△あふさ
あふさけり△あふさけり△あふさ

あふさけり△あふさけり△あふさ
あふさけり△あふさけり△あふさ

あふさけり△あふさけり△あふさ
あふさけり△あふさけり△あふさ

あふさけり△あふさけり△あふさ
あふさけり△あふさけり△あふさ

あふさけり△あふさけり△あふさ
あふさけり△あふさけり△あふさ

あふさけり△あふさけり△あふさ
あふさけり△あふさけり△あふさ

あふさけり△あふさけり△あふさ
あふさけり△あふさけり△あふさ

あふさけり△あふさけり△あふさ
あふさけり△あふさけり△あふさ

あふさけり△あふさけり△あふさ
あふさけり△あふさけり△あふさ

六十日 京 菅太神祭 菅家御所の旧址也西

洞院五条坊門の南に在る神降誕の地なり紅梅殿は是れ小社の存く其跡のなり神輿

て五条坊門の北にあり猶今絶えて五條坊門の北にあり

非 菅原の佐のまゝぬりし本表

七十日 仍 圓月 今夕の月を名づくるなり社詩は出たり

伊 三嶋神事 当社神祭 年分豆 七十五度の内今日其一あり

八十日 不成 龍王會 今日四海就日の竜王會なり日あり

八十日 京 御霊祭 上の御霊は京極通筋違橋の

おくりあり下の御霊は京極通大炊御門北東にあり上の御霊同神く

御美くは崇道天皇伊豫親王藤原夫人橋逸勢文屋宮

勅して元文帝をまゝいそひたてまつるあり

○沖の御美は上の御霊のち旅吸之桂の御美祭今日相撲あり

八十日 南 西大寺光明會 今日あり

八十日 都 廿四日運へ八幡太郎美家原空

八十日 伊 素名祭 春日大明神を祭るなり前日社の

前通南北に大車一輛あり夜ふ入挑灯はびくし當日車を南北へひきまゝに

九十日 今日白髪と抜くははの交易又ハ衣服と裁きなり

八十日 女居天神河上原八幡祭上芝原祭内原西原山村在

八十日 南 韓國祭社は高間町の都南韓國町あり韓神の社

東宮舊事云曰太子網妃有石

碓一枚とある燈籠あり今の木

かて製する持盤の後世木綿を

專着用するに至りて石と木小引と

なるる也今京師の洗坊不用石

盤にて繪子紗綾統等ふつと付ふ用

衣打 △衣四手打△衣三手打

何きも衣打相子あり

歌ふも玉もゆふ衣をうら振流し類え

新古今 輔尹朝臣

秋風いよひひびく鳴るる

いまやあそん妹りさころも

夫木 名如搗衣 家長

芹の原まかしのをるまへうの夜

あまの湯やさいぬかの世や

詞 打ちあそぶ。打ちあそむ。くち

びうら。ひく。ききう。む。つら

は芳。ゆき。綾々麻衣。月の

夜多。月澄む宿。月よころも

洗ひ。志川の女が寝ぬ夜も

ら向。夜さむ。はぬ夜あ

友。うちあそぶ。里こ守うの

月ふるみて。何。うつ芳

たへてささゆら。枕よひく

玉川。芳々守。松風。あねる里

雁 雁のそらも 旅多きよ

夏は藤武が故事。旅多きよ

又の旅よありて。右の美と

ありひの美とすて。ささゆら

か。ゆらひ

連 衣ふひく。石や月のぬく

里 衣ふひく。石や月のぬく

俳 我石かて表とす。夜ゆ

石まのま。彩はる。白ひ

ゆらひ。ゆらひ

狂 寺に肉ふ石の芳のまゆら

かのたろけ。つらうや

東 連

連

連

連

連

連

連

連

詩 砧五字對句

同上

星河秋一雁

傳音暗斷続

砧杵夜千家

鳴杵自下當

詩 砧七字對句

詩 礎

四野山河通遠色

遠村砧

千家砧杵勵秋聲

夜雨中

詩 礎之詞

王昌齡

長信宮中秋月明 昭陽殿下

衣聲 長信宮ハ漢ノ成帝ノ母ノ

堂中細草迹 紅羅帳裏

堪情 白露ハ堂ノ中ニ生タル

スモノ、帳ノウチニ居テオモヒニ

夕ヘオヌルヨレナリ

毛見

毛くつひのこへての草

是ナリ。博物志曰石ノ骨ニ

川ハ脉ナリ 草木ハ毛ナリ 土ハ

肉ナリ 故ニ毛見トイフ

俳 毛見海て滲りて打月影

落水 稲又実入る田入

俳 あなをを考す身れは

狂 身心あつさむひ世帯

下簾 魚の身重くなりて河下

哥 夫木

る眺る名跡の川にわらや

俳 下簾栢の跡をけり

ふくゆる水いそぎそ

俳 下簾栢の跡をけり

新古今

大いこの夜の露もれは若死の秋も
若死の秋もれは若死の秋も

能初秋の空つちあふ秋の露もれ山

初汝 此月の汝の大ふ満る月
故まろろ。秋の金気

金の水で得て盛るる故此月大
汝有時るるへし無名抄出

能初汝やまろろ六の松え 凍巴

松の露もれは秋の汝 詩六
今もろや初汝のれ名がけ岩 風光

詩 初汝七字對句 詩礎

雲日半陰川漸滿 吹地轉

客光皆過浪難平 就天浮

初汝 伍子胥吳王
故筆 二殺サレ其屍ヲ

皮ノクタクロニ入レテ 江中ニ流レケル
ガ其屍流レニヨリテ 波ヲ揚ゲ

潮ニ依テ往來レケリアル時
子胥白キ馬素車ニ乘リア

潮ノ上ニアリシヲ見ル者アリニ
是ニ恐ル是ヨリ毎年仲秋既望

潮水極テ大ナル時ハ衆人旗鼓
ヲ以テコレヲ迎フナリ

草木 此部は八月草木と出づ
如此印の三秋は用素る物

初紅葉 秋木の葉黄くも
紅くもるるをいふ

紅葉とる木の。機樹。楡。柿。もも
。合歡。其外教多し中にも

かくでの葉の紅くもるるを見
事こそ人々大に賞とる故紅葉

くついかへでの事と思へう然と
くもいふへう紅葉と奇いもよ

の錦とよまらるるも雑木の紅
葉あり能階まの薄紅葉△初

紅葉と句作して八月と守攝

のこ紅葉（紅葉）のこり後の事

奇奏（奇奏）のこり後の事

非乗物（非乗物）の似の責言（責言）の重頼

敗荷（敗荷）の荷衣（荷衣）の蓮の葉（蓮の葉）の秋

哥（哥）の秋風（秋風）の沈の蓮葉（蓮葉）も

非破（非破）のさぬと美（美）の衣（衣）の黄道

狂（狂）の白身（白身）と玉（玉）の破（破）の月（月）の影（影）も

詩 敗荷詞 東坡

紅錦（紅錦）機空水國（機空水國）窮（窮）轉頭（轉頭）千蓋

偃（偃）秋風（秋風）の夏（夏）ハニキ（ハニキ）ラオル（ラオル）ハタ（ハタ）如（如）多（多）ル

枯事（枯事）都在沙鷗（都在沙鷗）冷眼中（冷眼中）蓮

花ノサカリニ其アタリニアゴブオビリ

新薑（新薑）州（州）秋穂（秋穂）とさす

俗（俗）は川安（川安）の心（心）の如（如）かたな（かたな）のゆぬ

本朝（本朝）漆色家（漆色家）は用物（用物）と漆（漆）の

似て細く（似て細く）うす（うす）い（い）莖（莖）九（九）一（一）煮（煮）て

非（非）福祥（福祥）の似（似）の秋（秋）の安（安）の如（如）の色（の色）秀石

名木散（名木散）非（非）借季（借季）寄（寄）は昔（昔）より

説（説）は搦（搦）搦（搦）林（林）の類（類）此頃（此頃）紅葉（紅葉）して

散（散）りの物（物）名（名）へ（へ）つ（つ）く（く）尤（尤）左（左）も有（有）し

牡丹根分（牡丹根分）夏川（夏川）の地（地）と（と）乾（乾）

古（古）き（き）圃（圃）の土（土）

細く砂と交ぜてよく篩ひ八九月
紅き芽と出せし後この土に
移し栽べし糞溺と用ゆるは
よりかすひ冬油渣とをに

根のかさねを置へし
非根とてか家の香をぬきし
狂果核といはれて約半りけふの
はぬる根といはるるものと云

木芙蓉

△芙蓉とてつるもの
木蓮 自氏文集 拒霜
事物異名 華木 本州 和名 木らす
八九月初て開く故拒霜の名あり

○本州李時珍が説くは芙蓉と
つる荷花のこゝに偶此一物荷花と
相似とて以て木芙蓉と号くと
云 後世二物一名と混ぜしゆへ
故終に荷花と水芙蓉といふ
此のゆへ木芙蓉とつる

非 ぬるものよき芙蓉
木蓮や花を咲く時もあり嵐雲
湖春

木犀花

○花桂 七里香 本
州家の説は木犀へ叢桂とす
本州尤然りさしは桂の種

桂花

是とての桂のこゝを
つる一種の叢桂とて
木犀といふ一種の苗桂ふて葉は
三とらの文あり其花黄きり又

白きあり但し加茂祭りに用
ゆり桂の花三四月にて是れあり
ら守享保中南京種渡りて所々
小移り葉の筋未だ通し是

上品なり肉桂桂枝桂心官桂此
木より出るありこれとも日本
より出る桂樹へありたるは中世
の人けありさるる

つるの葉は誰か植て之うこの
月にあるてへるるなり 光俊

詞月のくろく。柱と折。柱の死
○かろくわきまのくろくろくろく

俳 白ひさふふ深うた柱の 李玲
方ふさう 葦酒のゆせ木樨む芭角

狂 只ひらうたありうたるのな
傍もせ禅ふ木樨の花 実明

詩 疑露堂木樨 楊逵秀
夢騎白鳳上青空 徑度銀河

入月宮 ユメニ鳳屋ニノリテ天ニホリ
スガニ天ノ川ヲワタリ月ノミヤ

三身在廣寒 香世界 覺來
身ハ廣寒トイフカウ
バシキ世カイニアルト

簾外木樨風 身ハ廣寒トイフカウ
バシキ世カイニアルト

縷紅 葉細密 七枚
藻のじし 浅青色

檀特花 一名西番蓮の葉
芭蕉に似て三
四尺は過も冬枯て春生す
七八月莖とめらんてくると

ひくく赤くして穂のじし
實とりのて念珠とす意
該仁に似たり

能 かくあのは 洋や極物 龜山
金剛草 一名狼牙の其葉
獸の牙のごとく

花の後 小豆の莢のぶくく
して中小実あり根甚とつよ
くて牛馬とほまぐ七

能 約つやくももはし 約つやく 乙田
白粉花 夕綿 此花駿州
の野徑に一面小

満ち咲き春苗と生し冬は
枯る葉雞頭のくく花丁子
不似り大抵赤し其外様々
あり実と白粉あり夕は開き

朝 ちひさし高サ二三尺より
非 たりもやいふ小豆なる葉

狂 志赤なる月夜の中戸に
とるるは花のけしき 不二

草もさゆへ鬼のまじ草又志と
ふもいへくかたなり万葉も
是のまじのまじを對するゆへ
かくまわて名づるなり此
大は論あり補遺出す

謡曲大江山は紫苑とくはあふ
やんねふのまじとくは誰
がつるもく名やるとくあ

⑩ 非 花のまじを花のまじ
月草 鴨跖草 花と碧
蟬花と云の俗は露草

△ 青花も云の夜月の影小
くともく久く咲くゆへ

百夜草も云花の汁と紙
まじり 漆具も故まじり花

もついで近江国は専らこれ
女の職も昔此花とて衣とす

まじり月と云の花と衣色の
移りやまじり恋歌を多くまじり

万葉はまじり花のまじり
わきてのはらうのまじり

⑩ 非 子松のまじり松のまじり
月若や衣も咲く物まじり

宇治花園 宇治の應神天皇
の離宮まじり

后は太子の御坐たりて
原日御宮と申す時の御園

あり是と免道雅郎子と申
奉らるり花園のまじり中は秋と

専らとまじり今の人も同

⑩ 寄 新勅撰 慈鎮

昔はまじりのまじりやまじり
まじりまじり山の花のまじり

○ 此哥はまじりまじり
糸切齒等と宇治の関白の花

園はまじり非も其故に臣下の
花園と子孫とて慈

鎮和尚のまじりまじり
まじりまじり

まじりまじり

①花室の青きと為る葉の青き

②花室の青きと為る葉の青き

③花室の青きと為る葉の青き

④花室の青きと為る葉の青き

⑤花室の青きと為る葉の青き

⑥花室の青きと為る葉の青き

⑦花室の青きと為る葉の青き

⑧花室の青きと為る葉の青き

⑨花室の青きと為る葉の青き

⑩花室の青きと為る葉の青き

⑪花室の青きと為る葉の青き

⑫花室の青きと為る葉の青き

⑬花室の青きと為る葉の青き

⑭花室の青きと為る葉の青き

⑮花室の青きと為る葉の青き

⑯花室の青きと為る葉の青き

⑰花室の青きと為る葉の青き

⑱花室の青きと為る葉の青き

⑲花室の青きと為る葉の青き

⑳花室の青きと為る葉の青き

㉑花室の青きと為る葉の青き

㉒花室の青きと為る葉の青き

①花室の青きと為る葉の青き

②花室の青きと為る葉の青き

③花室の青きと為る葉の青き

④花室の青きと為る葉の青き

⑤花室の青きと為る葉の青き

⑥花室の青きと為る葉の青き

⑦花室の青きと為る葉の青き

⑧花室の青きと為る葉の青き

⑨花室の青きと為る葉の青き

⑩花室の青きと為る葉の青き

⑪花室の青きと為る葉の青き

花すくは月の光りほろけり
みづをよのまはるは西行

○此三首の奇にて考ふべし一首
ハ増穂あり一首ハ白く色

白く色あり一首ハ穂芳色あり
又十寸穂と云て尺は満穂と

出してつろく臆詫あり信
用より右の奇のこく詠

根地草 河原ふ多くあり初
て兼五葉莖葉とも黄緑枝

穀精草 又こいつくとも云一名
○竹筒草。鼓槌草

○春より生じつとも花出
ざれに分るごとく八月大鼓

のぶらけられた花とひくく
葉ハ細長

○星まや梅んと溝の天の川 東
○星まや梅と一夜の花を喜

穂とる寸塩漬り野ふ
○此種の花はしほの名酒九一

黄蜀葵 菜ハは
不似たり

煙草花 一名 煙花。はなこのと
ハ世人よく知るあり

○あつたむ浦をぬも煙草
人のをくおのまわくこそあれ

藍花 花赤くして見ふは
藍汁の葉よりありて

五六月小刈る物ゆ多く花
と見ふはなまなく種とる

為る残せり物ふ甚とれい
○一うくのちまはる藍の初目華



蓼花

△蓼の穂。又穂蓼。△紅白数品。つゝ

○大蓼。毛蓼。大蓼。四季も小花のあり物あり。枝葉少し

らうさく味ハ勝る。大蓼ハ五六分小立のハ幹も太き者ハ小兒の拳に毛蓼ハ大蓼の節毎ハ毛あり

歌 万葉集

我宿の穂とて古幹つゝと也
ふかりまてに思ひし物とん

狂 蓼はか合ふ虫を不耐はれハ
細く 細ふたやさんらん 德音

蕎麥花

斯のく箱の内

の角といふより世ハ紋如の角切
角といふ物の稜折敷といふ物也
そびて云も実の三稜なりといふ名
付しとて花白く少く茎の下赤
一名。收麦。烏麦。花麦。種
七月花ハ八月刈ハ九月あり

俳 若の麦はまこと花てもて守

若の麦の心はゆるやたる岡の松蓮二

蕎麥 故事

河漏

河漏津と云ル
蕎麥ハ天下

第一ノ名物ナリ因テ蕎麥ヲサ
シテ文人墨客ハ河漏と云ナリ

蘆花

△芦の穂一名蓬蓎。
又葭といひ葦といひ

大小よりての名ありといふハ
いふ種類よりハ花ハ風
あみて雪のこころらう地よあ
つらうてハ絮のおく

哥 結風ハ波さちれハ難波江の
あハ穂よりそ亦も移る重之

俳 若の穂ハ笑うるもよあの子 去来

詩 芦花五字對句

同上

黄葉倒風雨

沢国幾千年

白花揺渚洲

漁村兩三家

八十五

詩 芦花七字對句 詩礎

一灘浩々花如雪 舞秋風

兩岸蕭々葉帶風 迷夜月

項羽草 花はがんひのこくく
表紅裏黄く

虞美人草 此花よくと季せ
つ定めしこころや

今案ふ此名出て口決なり
大和本草より名花譜及び園史

美人草と云物之聖粟の變生の
物と見えたり一名美人聖粟と

つう花彙。類説本草時珍が
説ひ各美人蕉とつうひんごとくも

決断せし然きも謠曲の項羽
の文より露州にて秋草の葉毎

は影やるといふ一部の趣意秋

たり美人草秋草と決せり今
案の口決いれらと以てつう身

べし謠曲の作意はよれの本軒
は於て美人草の名称とてふ

三百年及ぶ依て是と標と
せ秋小決して可なり

龍膽 龍膽古今集△並龍膽
蔓龍膽三種あり花

葉ともい皆其姿うつり野多
和名とて草和名抄 たつのは

延喜式 龍胆草 龍胆草 龍胆草
いり草能因集やまひらふ字鏡

古今集 物の名 友則
我寓の花ふとてくもこしん

玄参 又ハるらごごぬけん草
ひらひらするが(一名山)

野芝麻。能消草。教品
あり胡麻と似たり葉青くて

黄色と帯う花此月枝毎
小穂と生じ長と六七寸肥う

二尺ふもさ所ふりて小異
あり江戸の花のさのつる

みこん跡の白のごとく故
いさの白つたの名あり

木賊川 川千して物とぞく故
砥州と名はるる

哥 夫木 仲正

とくさる考は名ふの木はる
ふれつる竹の秋乃月

本織川るしんは乃麻るる
第萱 萱川△萱背△萱背
軒端の三秋の廿二日出

茜堀 異名茄蘆 俳 子なる
小深るもは茜堀實

苦参引 和名とひ草の牛
の舌痛の生葉根と

ふふ葉用と付葉の槐ふ似る
春生り冬凋む花の黄白根黄へ

哥 ちれはさるるさ田のちれらるる
秋のちれもちれらるる外西行

たやくり 千振とつる物とつる
葉はるるさけり花

桔梗ふ似る苗五六寸いて一根本
莖生と然も千振の秋白花の

薬堀 此月茶草の根と堀
べー根実しを氣つじ

俳 茶堀の供の供の供の供の供
鋸の柄は朱てかかたるる

石榴實 一重ふれ実と織ふ
千重ふれ実あり

皮の内蜂の巢けとく膜と以
てこれと隔つ実へ赤く人の齒

のぶく数遠く多し一ツの内実
物敷鬼子母神と祭ふこれと供

こころの子多き瓜以てあり
妙葉 啾のかりなま

哥 續後拾遺 物の名
うらもころかきさるる

瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

俳 本 草 子 瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

瓜 蔓 藤 葉 花 實 子 孫 七

王瓜

一名落鴉瓜。地瓜。類

の枕。藪の中ふ多く生じて蔓
中へ葉馬蹄の如し鬚あり五
六月花あり枯葉の花は似たり
白花あり瓜は枯葉より少く
長し秋冬熟して赤し枯葉は熟
して黄なり中ふ子あり蟠脚の
頭の如し似たり又和俗に
瓜文のさぬ似たり玉章の
名ありこれと類なり又醬油煮
ふして食ふ

非

瓜つるやなるまゝの種瓜子
又瓜葉菜瓜は果ぬかり瓜丸

狂

瓜ふつる瓜の瓜つるの瓜丸
蔓よかりすの瓜丸の瓜丸

種

瓜種を瓜の種とて夏に
瓜の類は来春まゝ種てたぐへん

種瓢

瓜瓢を瓜の瓢とて夏に
瓜瓢を瓜の瓢とて夏に

瓜の類は来春まゝ種てたぐへん
瓜瓢を瓜の瓢とて夏に

瓜の類は来春まゝ種てたぐへん
瓜瓢を瓜の瓢とて夏に

非

瓜つるやなるまゝの種瓜子
又瓜葉菜瓜は果ぬかり瓜丸

眉兒豆

京大坂にて陰元豆と
瓜瓢を瓜の瓢とて夏に

持渡

瓜瓢を瓜の瓢とて夏に
瓜瓢を瓜の瓢とて夏に

狂

瓜瓢を瓜の瓢とて夏に
瓜瓢を瓜の瓢とて夏に

菱取

瓜瓢を瓜の瓢とて夏に
瓜瓢を瓜の瓢とて夏に

草菌

瓜瓢を瓜の瓢とて夏に
瓜瓢を瓜の瓢とて夏に

草類

瓜瓢を瓜の瓢とて夏に
瓜瓢を瓜の瓢とて夏に

草

瓜瓢を瓜の瓢とて夏に
瓜瓢を瓜の瓢とて夏に

草

瓜瓢を瓜の瓢とて夏に
瓜瓢を瓜の瓢とて夏に

草

瓜瓢を瓜の瓢とて夏に
瓜瓢を瓜の瓢とて夏に

草

瓜瓢を瓜の瓢とて夏に
瓜瓢を瓜の瓢とて夏に

草

瓜瓢を瓜の瓢とて夏に
瓜瓢を瓜の瓢とて夏に

草

瓜瓢を瓜の瓢とて夏に
瓜瓢を瓜の瓢とて夏に

茸草木々げの類なり。菌の字ハ笠ある物といひて松菌上治推菌の類入。和名よきのこと。称するに夫々の木の下に生ずる子けしといふ心を推の木の下小推といひて生ト根の下小根たゞと生とする類なり。

○菌ハ木菌あり。△土菌有。生じ

松茸 松の氣と以てその下は生じ人のよく知る丸あり。○茯苓多き処ハ茸とくは西國ハ茯苓多し。

茸符 至て茸類と符といひ。ハとも先松茸と第一等。

○排 入ていんそそるの菌より蓮二。ハ常物や云々の衣の被衣タ。

初茸 秋山野の松樹有る。地は生じ毒あり。

石茸 ○石芝。表青く裏黒く。峯頭巖上てもあり。

嶮所生じ若放る採る人奮いのうて大木ふくりにけりねろされて取らうと云ふてあやし。

鼠茸 漢色。蕨茸。朽木老樹の根さぐり出づ。

針茸 鼠茸ハ假て織は數十。

本並び生じ針のこ。排針茸や老も女のこ。鹿茸。

覆茸 △滑るき。排ふら茸。ヤ足含の俵の縁を茸。

棕茸 棕の木ふ生じる物といふ。形覆るけ小同。

平茸 異名。天花茸。山林の湿地に生じ。

兔口茸 湿地に多く生じ。表褐色。端まがう。ていんハ似たり。滑らふ。ハあり。略蜂の景れ。

紅茸 (漢名) 紅菌一名朱茸 (和名) うぶひと茸。こ

たけの赤さけの仕下りの殿赤
大毒あり本州の葛花菜云々此類之

藎茸 (非) 藎茸の中を生じ

革茸 又鹿茸といふ秋野の生
と色赤黒

標第茸 (非) 標の根の子
代の標第茸をいふ

狂一草の百経てりる物さしき
志めらるる系のとあらるるは道喜

舞茸 (非) 平茸の似たり
舞茸の西の草

楓茸 大楓子といふ木の上の
生とるなりこれて食へ

笑ふてやまびとつう是毒の
あつらなるく笑ひやめ死とる

猪茸 △蛇茸 △天狗茸

月夜茸 △栗茸 △柳茸

つぎも秋生とるものおのく
毒あり食ふべからず其外種

類多し悉くあつらふ
あつらふ又春夏冬いも

とる茸ありくわくは追て
補遺よひん

松露 菌譜に麥茸。池田
の中を生とる

狂茸 松の葉といふとあつらひ
松の根のこころは似たり中庸

茸菌毒あると知る法

新茸 下ふ文多し物文といふ茸の
夜光りある物。爛れと虫と物

夜光りある物。爛れと虫と物

煮熟して人を照し影さた物
○春夏蛇のうろ物。此の皆
人と殺さるとく慎むべし
○又塗物の上よりくわくわくし

中稻 八九月刈り取り
稲とていふは早稲
とて早稲といふも
○曾丹葉 根の中務の子も乾境
うらてひりく種され葉もじも
○非 心を不病を掃て中務う貝之

粟柜引 五月七月の部も出
今ハ兩種もい
晩種より柜引櫻黍の二種あり
○非 我門のさひさひく柜細葉

貝割菜 菜の種土と切
て漸く二三寸
二葉の形貝とさうなるか似たる
故ふいふ大根蕪とも同時ス

摘菜 小葉二葉長くと初て
葉の形調ふとつとるん
間引菜 摘菜の少し長いたる
とつと種と多くうゆの

故長とる時間て引る故と名づく
○非 色とるいろのさひさひく葉
さひさひ菜や山の縁の又サリ可夫
菜畑より分て入て間引か冬花

○在 ちり菜の種も茶も同じ地を
かすさるひさひさひてさやな隠士
中級大根 や長くと根の大き
こ筆れ油の如く

菜種時 是ハ蕪善の種類
とてはつとのかさふ
あつは是と真菜とつと又油
かさほつ物かんの油菜ともつと

○非 春と買ふまゝの種もたつと
たつたの油をさるや菜種とて
胡麻刈 一名 昔囊。此月
初の頃ハ八接あり

胡麻とて菜と種る法のさく
しとらぬれい苗と生む茹く

の杯めしそくハ壽命の
くをりさり

種植 △芥子蒔 △大根

蒔 △聖粟蒔 ○かじ数
種あり春

不老といふて第一と守白茶を
佳あり○大根亦数種あり○

八月十五夜小種とすけハ花実
とも大は○つとも八月種とす

あり 三ツ回会ふ出さう
非けりきうハ道の路確らん 中 申

字案のいふつちまや芥蒔 紹 藤
大根ふもさるの乃ハあけて花 清白

生類 此部ハ八月一ヶ月
の生類をあらひ

燕歸 △燕ハ春乃
社日ハ來り秋の社日

不歸さく 本州細目ハ見えさう二
月の部ハ出せハ爰ハ畧す○燕

とさうりハ春なり 本州ハ越 燕
胡燕の二種あり 越燕ハ常の

燕なり 胡燕ハ(和名)阿 萬 止 里
とつハのにて俗ハ深山燕といふ

哥 夫木 粟とていしてゆさうハ燕
なれさハ秋の風やうれしき

俳 いぬ燕行傍の札のちぬぬ眞
はるる免修ふやふとさうハ長水

方ハ遠さう去ゆつとちハ 塵
地いさハそをえははらうめ皇可

在燕の住らうかハ秋の目れ
ゆつらハのかりるをうま 和菜

詩 歸燕詞 崔道融

海燕 頻來去 柵人獨滯溜

ツバハ海ノ上ヲ春ト秋トニタビクイカ
リキタリスルニソノ燕ノスミカニナル我

ハイク年モコノ他國ニ 天邊又相送
ナガトウリラスルコトヨ

腸斷 故園秋 トラクカハルヲ見テハ
ラハタノタニホト故郷ノ
秋ノケレキカコイレイトス

縮負鳥

諸家の傳説多し

つて鶴鶴也一と理とち元來古今の三鳥の一にして極秘され

尚又委しを道て補遺の出と

哥 夫木

家隆

秋の田の給おんせもれとくれん

本の繁りよおんせもれの澤ん

古今 忠岑

一書ハ三鳥化用の哥とて 赤入 民の秋の多おんせもれの澤んを

能 父母や君とおんせもれの家心

狂 ひとりやまひて君もぬるもど 何となくもいふおんせもれ 貞木

鶴鷄

異名 鶴渠。雪姑 和名 △ハハハハハハ 綺語抄

△石たきさ 八雲 △ふりくさう 和

△らぎわ 八雲 日本紀私記 △さしとて 八雲

○日本紀神代卷いさささ 八雲

多この二神始て夫婦の事を 行いぬいたる時鶴鷄庭小来り

て首尾とたくと見てささり 一といふとつぎわハ鳥の名

これあり其外異名も皆尾とた くとついでつう

哥 夫木

寂蓮

とさかへいおんせもれのいささか さらけささる人なれハそ

能 知いともふたのいささき 眞 怨美の尾とたくいれ行るま支

給おんせもれあめあめの形家重 狂 せなさいいささかせとせさけ ね けいさうもせらるへたり 國長

渡鳥

此月諸鳥ひかり 飛ぶ事余月ハ

して多し故ふ此月の景物と
とらうり鳥と云ふ等のことく

寒と恐まて北より渡つて来る
たうりてりへはあらず秋の草木

ともふ実とひこひ熱と故う
是と求食とてひこ飛ぶ中ひも

異国より大洋と渡り来物多う
非かひへの首めくや渡りる芭蕉

一むれ川へちりたり渡りる扇浦
渡りるをよめくそのみれは燕村

朝鳥渡 雁鴨をくのかよ
う守朝さく山の尾

と越えさきくろとひふ尾越の胎を
哥万葉 あらふたど岩く後れつた

けりもく坂をの羽越さして下巻
非胡さくあ渡る小鳥の二羽は芭蕉

小鳥渡 秋の色々の小鳥渡ると
つ口の渡鳥と同一と

哥雲をうたえふ小鳥の渡るふの
何れあるへの治のひまそ 雲房

色鳥 是れ色々のうらうらき
小鳥の渡ると云ふ御筆出

鶉 雀より小し全体黄
色くて彼ひい色ひい

茶をくつらへ此鳥のつらくと
こし青と帯て頭脊黒色く

其声清滑うてうく嘖るなり
ヒニクニとつみかじし種徳河原

ひの唐ひの紅ひの蓼ひの
哥山家集 声せきりさくかりと云

なまし柳のやんひひのひくさる
非ふ次のほろもく羽のさる流

山雀 山陵鳥の形やうらよ
似て好んで胡桃と食ふ

能嘖つて輪とらる 飄草又らふ
やとかこの角置の糸とらとら

哥新帖 ふくむ守るるをふり次
おあめいふくこあなりなり 光俊

非ふくくはた巻つて司石素徳
ふくくや月くして秋もくは 翠月

鶺鴒
△小陵馬○山雀ニ似少
○小々々先づとつゝ此鳥

あまうこ集つたり合て耶と故を
哥夫木こひかき小々々此鳥とてと

我ひとつ 林のちうとそ
山家集あまうこひめく友とけふふふの
ねらうにふむ此のしこあ

非川あゝの押あつてける小雀外秀
四十雀二五十雀一 小々々小似て
大さう

○五十雀四十雀同鳥なり 卷てもと
久少形のかうさうと五十雀と号く

日雀
四十雀似て少く頭脊
赤色頬のやう黒白

まどつる一書不 鶺鴒とわてさう
非池ふ砂る竜田川への日雀ふ水奴

猿子鳥
三々圖會ふ
つる物又令

ひてるやと物も全体薄黒いろ
胸腹うす赤尾の下白の丸の両端

ふありまればも哥ふしりてり
まうこねもて此鳥のこあこ

のかくを鳴く良様の子のごと
しとつる哥いろ

照る猿子
藏器拾遺曰突厥雀
そのから雀のこと

をいて身あり
照はこふ位う母の餅の訓と恐知

夫木
冬の枝のあふまのうてまのこ
紅の葉のあふまのうてまのこ

頬赤鳥
雀より小さく頬のあ
くのあらくの声

高くくてわとく
非三月の秋のはあれの鳥の連鳥

畫眉鳥
鶺鴒より大きくの灰
赤色眉白くのあらく

頬白くの声滑うかうて鼓
まつるの小鈴の音ぬくくのチリといふ

と片鈴といふのチリといふのチリと
かくと備給くの山の深山やあら

ハヤルル似て啼きたも冠と云ふ
排 羽をふるむるの脊を翳るを時信

瑠璃鳥 大に雀のふくく大翠
雀小翠雀の二品あり

眼白鳥 排 大雀小雀のつ
わの目白か 秀石

狂 角力も小雀はくひと鳴ふふ
あをけり木をふけりあひそする 東園

鶉 一名鶉鶉。飛を多くい
らるる鶉より小く色蒼白く

頭上の毛起る好んで草木の実
と食人の草木の種をくわぐれ

物の其実と此鳥も食りち糞
の中より出る全と物と云うて

まけの極て生と殺るの鳥の性こ
ざくざくして常の網をかたはる

がとて逆さ方ふとせんさうりらの
放ると待て飛ぶ是も依て小あ

ま袋のよしてさるなり是
とひよどりあそくしん

鳥 排 此はふくくはるる鶉を
かきくてもさるるすの邪

排 ひとるの松の命をぬる鶉
鶉のそやりよりて月松ふ蓮二

鳥鶉 近年異国より来り鶉
卵をこして育川

鶉 魚狗 魚虎鳥 三代
一名 碧衣 釣魚 釣魚 水翠

金鳥 水邊の鶉より丸ま
ありて魚とくわひより雀より

とこり大なり尾をかく口
ち赤く大なり腹足赤く羽は

碧緑小く尤美麗なり
の神代巻曰天稚彦殞の處か

鶉と以て御食人とすといふ
是即魚と取ら故其役は感

あ 鳥とのむ衣の指の樽より
おれとすしかの川のせと公鳥

排 鶉や野にたふさるるさ大鳥
川せとや三鳥ふさるるさ大鳥

川せとや三鳥ふさるるさ大鳥

川せとや三鳥ふさるるさ大鳥

翡翠 一名山翠の魚翠。鳴と同物と少一

連雀 雀の大なる如く。頂又冠毛

あり雞のてこみれじく。赤色。つり黄色あり唐の雀ありと和名抄に出たり。

漢名は練鵲といふの音也。同いあぐみれとも別りのありこれを本朝まで尾長鳥といふ。ニヤ回会に出たり。

連雀や胡空の枝小丸より百鳥

尾長鳥 練鵲一名三光鳥。漢名鳥鳳。縹碧色

脊少し赤て帯山冠毛あり。目大しと驗青し其尾長さ一尺半余とく群飛ぶ声日月星と云は

排尾長なる鳥はらるる鬼瓦昌廣

狂うつてや女小似たる尾長なる。裾尻よりゆるふのをもせふ由鹿

啄木鳥 一名匠木。樹木の地。古里の尚品類あり

△てはきき。大小あり小て小ケラ大と大ケラとつみ小毛羽黒白相交りて美なり雲雀の毛色もあり足は黒く前へニツ後へ

ニツとて杜鵑のくじ又大方のりのい懸より小さくして惣身ふ

五色の彩色ありてうり頭。紅さもあり是と山さつて

いへつぎも啄木が古釘の如くむこと木とつきて虫と喰

ふ今△テラツキとつマテラツキケラの轉じらるんケラの木の轉え

夫木ふりけらるる木の積ふうりきてあうす良ありてうつさうか

能 木つさる獲物つるがの影嵐を

木つさる獲物つるがの影嵐を

木つさる獲物つるがの影嵐を

木つさる獲物つるがの影嵐を

木つさる獲物つるがの影嵐を

木つさる獲物つるがの影嵐を

狂赤き衣をきてて別れの赤の上
まつくさくくさくきこの名貞新

啄木鳥詞 王元之

淮南啄木大如鶴頭似仙鶴

堆丹沙 ワイナント云トコロノアヲウミキハ
大サカフスホトアルガカレフハ

紫長数寸勁如鉄 ハシカキトススニツツト上ニツツ
色ガウツタカイ

丁々乱鑿乾柏查 クチシノ長サ
一ニ寸モアリテ

鉄ノコトクコトクトレテカレタカレハノツツホ木
ヲミダリニツク

菊戴鳥 大サ目白ヤクあり頭
小黄あり花のこく

唐土にてはくろ花と花勝とい
るり故ふかく名つけらるるなり

非 稜をのりて美あり

掠鳥 形鳩より小又頂白
脊灰色好んで掠の木

小とびをり大小あり京師加
茂のほとり此鳥のわびるい

非 稜をのりて美あり

狂 戯るいほほやめむあき不
くろのむくまら守るくろ文海

栗鳶 鶴ともかく△海めり
一説イカガヤヤツツ

一名青背鳥 口より黄ふて毛
單色なり甚奇麗なる鳥なり

米と食ふ殊ふつとして人家小
飼て世話する二羽同く籠小

入るはつてあふ故一羽くし
甚清くしてヒチリコキとつうじ

又月星とみくもあふ春夏多く
こふれも秋の季と守雌の色あ

よく養ふ小はるりが大豆
とあふれば口の肉とせまりて皮

とせりうふあり

二条中納言定高はいうるこせ
家隆はふんふん

いろがよ豆のぬるとは後もさそ
ひらうとたふの何とあくらん

鳥類

鳥より故は世俗諸事翻轉
こゝろいそつとつへ又畧して
すうともつひ又轉じてとつこ
んとつふこれと又轉じて江戸

狂石膏といふ附子そとそく小
医作ういそとれどくヒクも 由鹿

初雁 八月初候ハ鴻雁來ること
礼記不見そより此ころ

早く來る雁とつふより奇にも
初て來る雁より去るは九月ハ

初雁のこゝろある奇も有ハ
元來雁の此項南來ることハ

北の国ハ寒氣甚しく雪深く
餅を食ふ故南の國へこころ

空室治百首 初雁 信実
其の秋のふれ玉つきのころつても

今こそあれし雁のこゝろ
千首 近初雁 耕雲

守あふさるすのよりふゆゆ
いまたにせつと初雁乃ち

詞 初雁の夢。今胡蝶をむる。
今教るやこ路もつる

非 初雁やけろふ雲の流波山音振
初雁やれ芝美るるをうりし 移竹

雁 △ハ音△ハ金△ハつる
△るる△ハかり△天津△

△ハのつる△ハの玉章
異名雲侶○霜翰○蒼そと野

鵝とつふ梵書よ僧婆といふ
かひといふ音なりと云説あり

てそいも詠に來まう。又万
葉集はかりくひい今いるま

詠じらとて以てこれハの名と
とべり大抵四種の別らあり

○真雁。白腹に似る△雁金
○白雁ちり

鵝 △野△もみ 漢名 鵝
性多瀦して佐鳥と交

鴻 菱食しむく。の大きな

変まるとして鴻と同じ

夫木 かりね 家隆

久くはすもれ守まぢれ

都小来さるかりね衣 重之

秋風やあへあつらん

詞 そろあつらん。今そを井と

ぐる。あつらん。けさつらん。

ある。秋風の吹をま。

の玉章 けつてある

の撰哉う故事 一の使

涙 一の涙の

琴 一の琴の

衣 一の衣の

連 一の連の

非 一の非の

狂 一の狂の

詩 雁五字對句 同上

忽聞涼雁至 下時波勢出

如報杜陵秋 起如陣形分

詩 全七字對句 詩礎

数声飄去和秋色 雁幾群

一字橫來背晚暉 暮天飛

詩 聞雁 玲瓏窓

虹影侵塔驟雨餘 聲々新

雁渡雲衢

只恐燕山有帛唇

雁之 雁四德

故事 本仲綱目云 零ル

熱クナレハ南ヨリ北ヘカヘルハ信ナリ

飛ニ次第アリテ前ヨリ段々鳴ク

ルハ礼ナリ 偶ラウレナトキ余

ノ鳥ニ配セサルハ節ナリ 夜ム

レヤトリテ一羽ハソノアタリヲメ

グリテ守ル晝ハ声ヲ啣ヘテ矢

サキヲサクルハ智アリ 己上ヲ雁

ノ四徳トスルナリ

雁書 漢ノ世ニ蘓武胡國ヲ

テ向ヒシニ軍破レテ匈奴

ノ虜トナリテ歸ルヲ得ズ然ルニ

匈奴イツハリテ蘓武ヲ死シタリト

云ニ其後和睦トノヒテモ蘓武

ヲ歸サズ漢ノ昭帝 蘓武ガ死セ

ズレテ匈奴ニトラハレ居ルヲ知リ

テ使ヲツカハシテイハシムルハ帝

節ヲ射サシメ至フニ其雁ノ足

ニ蘓武カ書ヲ結ビ付タレバ蘓

武ハ未ダ存命居ルナラン歸ス

ベシト申サセ玉ヘハ匈奴大ニ驚キ

蘓武ヲ歸セシトナリ 実ニ雁ニ文

ヲツケタルニアラス漢ヨリハカ

鷓鴣

昌塚の説ハ春と

小鳥の日本へこころの秋

守渡り来る時定まらぬ

まろくわが川までつくり和州までこれと石かよるといふ

不分明なり

非 傍くて開か桶はつかふ 懐き

江鮭 本州鮭。草魚。鱒。見えたり大和本州も鱒

魚とかけり。状鮭も同一湖中も生とる物名と異じて形少小じ

非 ああは奥合の幸傍の宿所 大成

白鯨のち井とよとれあはれ多 昌廣 狂とせそをまきと湖の面はうは

大刀魚 形うすく長く銀溜の光あり太刀の白刃

非 太刀魚や今も八条のりうと殺

狂 太刀魚と今もてうれつとこれの

右刀うとこのこまてはるるれれもやつとまいつておてるあろ不知者

落鮎 正字鱒 本草 年魚 和名抄

夫鱒は正二月の頃江海の間小生次第小河上小登る石間の

瀑布何程水勢之けり此も凌ぎそのなり夏の頃漸肥て

味美中秋尤長大ゆて尺及ふ此時草間小子と生と後

漸く衰ふ故に流ま不難るにあたり水も墮ひ下るは落鮎

魚と生とこれとまひといふ

非 五女や流あり鮎の川抄 下流よりちの鮎をそく 家隆

非 さひ鮎や打かんと完るゆて

狂 たるまへつたはあふこの鮎の

下梁 梁は奥とる具の川の

西岸より石堰中とて夫

計明て水と下し其処へ竹の簀と斜に掛らし置り水の簀と潜りて流し魚の水勢にまかひて簀の上へ躍り上る魚とあり

⑤ 夫木 今よそやせふ川の下りるかろく川にまかひて中盤に

崩梁 秋涼くあり魚の下りてはいて魚梁も河水に流る

崩は次策にしてとておこるる

⑥ 崩は梁なる川もまかひて尚白おまかひるる水柱とあり

蛇穴入 俗に曰春の彼岸小出て秋の彼岸ま入る云

月令に蟄虫坏戸と云り諸虫皆かくれは然るふ蛇の穴壑と其蟄とる時土と合んで穴ま入春穴と出ると此土と吐く是石と化るとこれと蛇黄と云ふ

必用

此部小の八月一ヶ月の要用の事とあるす

破		軍		向		方	
夜五ツ	夜四ツ	夜七ツ	朝六ツ	夜七ツ	朝六ツ	夜七ツ	朝六ツ
酉ノ方	戌ノ方	亥ノ方	子ノ方	丑ノ方	寅ノ方	卯ノ方	辰ノ方
辰七ツ	巳ノ方	巳ノ方	午ノ方	未ノ方	申ノ方	申ノ方	酉ノ方

時刻 西の日酉の刻申は申の刻事とて必用ゆふ月建

出行作事 東北の方へ向ひぬくは今日天道

東北へゆく或い請又ハ土とてをくるといふ北の方とてはとす

樂事 月の逍遥虫の夜遊のあつそはとて風袖ふさし

草小玉らる曉の露木に白ひとむかんと夕暮のたの山野

山の花錦とてまかひて籬庭ふ色

鳥のつろとあしつゝふとて與
と催ふささるゝし

占候 此月外の日度の日三ッ
あれは米麥とらじ。虹あ

はる春ふつり米の價大貴
秋分の後霜多々れ病あり

天氣 此月日和のうりるこ早
くして見ささめく月

わり暴風折々たふるこあり
海上慎むべし。雲は西より行

日と和と守北より南へ行と雨
と守。水まると雲は雨と守然

とも初めふ雲とてあうて散ぜん
と守り水まると日和あり。赤

雲くつみの災あり。紫の雲く
ては大風く戌亥ふ雲あれは風

生じろく此月陰氣さふふの不
ふより極めて風も高くわたり

大風ふくこあり。西風と日和
と。南へよりとも北へよりとも

日和は。北風の雨より夜分ふ吹ハ
夜北まじと稱して日和あり

衣服 帷子と着まふま
袴はひの色とりあや

時 教經書 整書緯 獲芳
かり裏あて

二藍 紅花と青 表裏と
花とそ深る 蘭 小紫

葱衣 表薄りへて裏青或ハ
此草以てとりもすべし

女衣服 八月朔日より十五日まで
ハカハ紗やかよひ。これ

さかのう守やう。ゆ 薄 せやう
さねのうんやう

ふすき **龍膽** かつめくろふ
白さひえ 同ドまき又

もみらなとあり
○八月十五日より九月八日までハ

綿つぎやほしの衣よりまじれ
うす色白く菊りちりやまは備

カナハアキヤウニヨツテヒトツノサカサキ
モツタルノニヘヒトリサイタリオサヘタリ
シテ百万愁魔降不得故應
井ル

用爾作戈矛
ワサク酒ノカタヲトシテカノ
ウレチオヒシリツケルナリ
碧香騰

月能遮冷破暑還須百
碧香ナド云イニユラノバ
寒ニキヲフセギ又シヨノ
ノシテアキ

好比阿房無限勝大寒
大熱此中藏
有ハ大モ全モコシテハ
シユビユ

酒樹
頃遜国ニ樹アリ石榴
似タリ其花汁ヲ採テ
瓶ノ中ニ停レハ数日ニ
ナル味ハハタ甘美ナリ

顧建康
顧憲之云人政ヲナ
レテ甚人知ヲ得タリ
故ニ人々味アツク昔キ
康ト号ク其清クテ且美
ナル云

八月飲食並料理献立
禁生姜八九月食ハ
物委
○茄子秋の後多く食
目と損ぞ○烏羊小児
好 兎肉今月より十月
物 食ハ他月の宜
料理 汁
が 汁
鴨 汁
清 汁
膾

八月飲食並料理献立

禁生姜八九月食ハ
物委
○茄子秋の後多く食
目と損ぞ○烏羊小児

好 兎肉今月より十月
物 食ハ他月の宜
料理 汁
が 汁
鴨 汁
清 汁
膾

汁
小
竹輪のぬが
はらら
車
青
こ

が 汁
鴨 汁
清 汁
膾

鴨 汁
清 汁
膾

清 汁
膾

膾

他
大
入
可

湯をのりたえ
こせう此粉
ろみせうめん
つまも地味

差味
かんてん
ちまくりりざり

ねすけ
ろりまへもせん
剥く魚ん
ういりな
いりな

赤こんや
あけふかんこん
かじ歌こと

煮物
かじ歌こと
のりな

めすけいも
ねすけ
やんいも
やまいも
うきも
さうせうざ

和會物
青あへ
ゆきこ
さきこ
さきこ

かとう豆
ゆりね
若肉
かじり

時魚
きんぎょ
きすこ
かろこ

鳥
うづら
はと
きん
あひ
かひ
ふも

